リアルドリーム文庫
とろめき修学旅行
早瀬真人
挿絵：みな本
清純美少女と早熟美少女
試し読み版

目次

Contents

プロローグ …… 4
第一章　禁断の覗き見 …… 14
第二章　思わぬ初体験 …… 41
第三章　美少女との相互口唇愛撫 …… 97
第四章　禁断の倒錯プレイ …… 139
第五章　念願の処女姦通 …… 168
第六章　愛欲の大乱交 …… 207
エピローグ …… 281

登場人物 *Characters*

宮川 蒼太
（みやがわ そうた）

大輪学園のテニス部に所属する少年。同じテニス部の日菜子に好意を持つも、なかなか告白するきっかけを掴めないでいる。少しお調子者で、見栄っ張りな性格。

森崎 日菜子
（もりさき ひなこ）

蒼太と同じくテニス部に所属する清純美少女。お嬢様育ちで、おっとりした性格だが実はエッチに興味津々。美樹とは一年生の頃から同じクラスで仲が良い。

村下 美樹
（むらした みき）

バレーボール部に所属するボーイッシュで大人びた女の子。お天気屋かつサディスティックな性格で、蒼太と恋人だった事もあるが、たったひと月で一方的に振っている。

第三章　美少女との相互口唇愛撫

1

（俺……ホントに美樹とやっちゃったんだよな）

童貞喪失したその日の夜、ホテルで夕食と入浴を済ませた蒼太は、宿泊部屋の布団の上でボーッとしていた。

しっとり汗ばんだ肌、愛液でぬめり返った女肉の感触。手のひらやペニスには、いまだに彼女の温もりが残っている。

後背位からの情交を思いだすたびに、若茎は節操のない脈動を繰り返した。

（やべ……二回も出したのに、またチンポが勃ってきた）

腰をひねって股間を隠した直後、日菜子の面影が脳裏に浮かんだ。

交際を申しこみ、キスを交わしたまではよかったが、牡の情欲に抗えず、身体をまさぐってしまうとは……。

非難の視線を浴びせ、そのまま逃げ帰った彼女の顔が忘れられない。

食堂では席が離れていたため、謝罪はもちろん、目すら合わせていなかった。
美樹のアドバイスどおり、童貞を捨てたことで、ギラギラした欲望は鳴りを潜めたのだろうか。
（確かにさっぱりした感じはあるけど、チンポはまだムズムズしてるし、あまり意味はなかったかも……）
明日も午後から自由行動が組まれており、日菜子と行動を共にするのだ。
（まずは、ちゃんと謝っておかないと。果たして、許してくれるかな……って、自由行動は美樹もいっしょなんだよな。あぁ、ホントやりづらいよ）
溜め息をついたところで、蒼太は背中に向けられる視線に気づいた。
肩越しに振り返れば、クラスメートの男子四人が部屋の隅から怯えた眼差しを注いでいる。
「何だよ……お前ら」
身を起こし、ぶっきらぼうに問いかけると、彼らは気まずげに顔を背けた。
（まさか……美樹とエッチしてるとこ、こいつらの誰かに見られたんじゃ。いや、そんなはずない。あのあと周囲を見渡したけど、人影はなかったし、山を下りるまで観光客の一人すら会わなかったもんな）

何にしても、様子がおかしい。
蒼太は布団から立ちあがり、肩を怒らせながら男子のもとに歩み寄った。
「聞いてんだぜ。答えろよ。俺に言いたいことがあんだろ？」
「いや、あの……別に」
ノッポが俯き加減で答え、他の三人が彼の背後で縮こまる。
「そんなわけないだろ。四人が肩寄せ合って、じっと見てるなんて。どう考えたって、普通じゃないぜ。いいから、言ってみろよ」
今度はやや強い口調で脅すと、メガネが青白い顔で口を開いた。
「それは、あの……何と言うか……忘れてるんだったら、それでもいいかなって話してたんだ」
「忘れてる？　俺が何を忘れて……あっ」
ようやく昨夜の一件を思いだし、怒りの感情が沸き起こる。
トランプゲームで負けた蒼太は、女風呂の覗きという罰ゲームを約束どおりにやり遂げた。にもかかわらず、彼らはチャレンジの最中に部屋から逃げだしていたのだ。
「そうか……そうだったな。俺一人だけ残して、お前らは風呂に行っちまったんだっけ」

「それは、もう言わないでよ」
「……わかったぞ」
「え？」
「お前らが、怯えてた理由」
にやりと笑えば、四人は同時にビクついた。
「罪滅ぼしに、女部屋の夜這いにつき合うんだったな？」
「ホ、ホントにやるの？」
「当然だっ！　すぐに準備しろっ」
女子部屋への訪問は、前もって美樹に伝えてある。
日菜子と顔を合わせるのは気まずかったが、仲直りのきっかけを掴むにはいいチャンスなのではないか。
（エッチのあと、美樹もフォローしてくれるって言ってたしな）
俄然元気を取り戻した蒼太は、気怠げに立ちあがる男子らをせっついた。
「ぐずぐずするな。ジャージのままでいいんだから」
「あ、あの……すぐに帰るんだよね？」
四人の中でもいちばん真面目な博士が、涙目で問いかける。

「お前ら……まだそんなこと言ってんのか？　最低でも三十分はいるぞっ」
「そ、そんな……いったい何の話をするの？」
「怪談話だ。女子たちを怖がらせて、盛りあげるんだよ」
そう言いながら、蒼太はバッグの中から取りだしたペンライトをちらつかせた。
「何、それ？」
「何って……怪談話を盛りあげる小道具だろうが」
他の三人は苦虫を噛みつぶしたような顔をし、中には深い溜め息をこぼす者までいる。
「いいから、さ、行くぞっ！」
覚悟を決められない連中と話をしていても、埒があかない。蒼太は男子らを出口に追いやり、息を殺しつつ部屋の扉を開けた。

2

（時刻は……十時十分か。ほぼ、美樹と約束した時間どおりだ。当然、女子たちも起きてるはずだよな）

薄暗い廊下は静まり返り、人影はどこにも見当たらない。
男子部屋のある四階は行き来が可能だが、問題なのは女子部屋のある三階だった。
見回り教師に見つかれば、今夜の計画は水泡に帰すのだ。
「お前ら、準備はいいな？」
「……うん」
「よし、行くぞ」
手で合図を送り、まずは堂々とした足取りで部屋をあとにする。まだセーフティゾーンとはいえ、彼らの顔は早くも緊張に青ざめていた。
階段に達したところで、振り返りざまアドバイスを送る。
「メガネ、お前、腹が痛いフリをしろ」
「え？」
「三階のいちばん端、保健の先生の部屋だったよな？」
「う、うん」
「先生に鉢合わせしたとき、クスリをもらいにきたって言えば、言い訳になるだろ」
「な、なるほど！」
「しっ！　でかい声出すな。いいか、これからは慎重にいくぞ」

コクリと頷く彼らに目配せし、階段を忍び足で下りていく。
踊り場から三階の様子を探るも、人の気配は伝わってこない。足音らしき物音も、いっさい聞こえてこなかった。
（よし、大丈夫だ！）
まずは蒼太が先陣を切って三階に下り立ち、周囲を見回す。人影がないことを確認してから合図を送り、男子らも恐るおそるあとに続いた。
二年B組の女子は十人部屋をふたつ使用しており、目指すは日菜子と美樹のいる部屋だ。
メガネがすかさず腹に手を当て、苦悶の表情を装う。他の男子がさも心配げに寄り添うと、蒼太は女子部屋へ一直線に突き進んだ。
二十メートルほどの距離がやけに長く感じられ、全身の毛穴から汗が噴きだす。
うろたえたり、不安げな表情は見せられない。
夜の女子部屋訪問は思い出作りだけでなく、ひ弱なクラスメートに男の度胸と根性を植えつける目的もあるのだ。
幸いにも教師は姿を現さず、蒼太らは難なく目的地に到達した。
四人の男子があたりをキョロキョロ見回すなか、背筋をシャンと伸ばし、威風堂々

と扉をノックする。
（早くっ、早くドアを開けろ！）
内心焦れながら美樹の返答を待ち受けると、やがて室内から鈴を転がしたような声が聞こえた。
「……誰？」
「え、あ、あの……」
声の主は、紛れもなく日菜子だ。
想定外の展開に顔を曇らせるも、もはやあとには引けない。蒼太は、いかにもバツが悪そうに答えた。
「お、俺……蒼太」
「え？　蒼太くん？」
すかさず内鍵を開ける音が聞こえ、扉が開けられる。レモンイエローのパジャマを着た日菜子が、信じられないといった顔で目を丸くした。
（う……かわいい）
少女の可憐さに胸がときめくも、おくびにも出さずに来訪の理由を告げる。
「男連中を引き連れて遊びにきたんだ。な、中に入れてくれる？」

「あ、う、うん」
美少女は薄暗い廊下を確認したあと、蒼太らを部屋に招き入れた。
「……驚いた。先生に見つかったら、どうするつもりだったの？」
「わはは。女子部屋への訪問は、修学旅行の定番でしょ」
「あきれた……もう。とにかく入って」
日菜子はよほどびっくりしたのか、昼間の不埒な行為を考える余裕もないらしい。
怒っている様子は見られず、蒼太はとりあえず安堵に胸を撫で下ろした。
（でも……おかしいな。美樹から話を聞いてないみたいだけど……）
首を傾げるも、扉はまだ開いたまま。考え事をしている暇はない。
「おい、早く入れ」
四人の男子が怯えた顔で室内に入り、扉と内鍵が閉められる。
奥に目を向ければ、生真面目タイプの女子が二人。こちらはジャージ姿で布団の上に座ったまま、唖然とした目を向けていた。
「あ、あれ……やけに少ないね。他の子たちは？」
「となりの部屋に遊びにいってる。私たちも、これから行こうかって話してたの」
「あ、そ、そうなんだ。少しのあいだだけ、俺たちにつき合ってくれるかな？」

「ちょっと待って」
日菜子は室内に戻り、二人の女子に許可を得てから手招きする。
畳部屋に足を踏み入れると、美樹の姿はどこにもなく、蒼太はムッとした顔で歯ぎしりした。
（あいつめ……俺との約束、すっぽかしやがったな！）
もとより彼女は、女心と秋の空を絵に描いたような女の子なのだ。
この調子では、日菜子にフォローしてくれたのかも疑わしい。
（出る前に、スマホで連絡しておけばよかったな。まあ……いいか。夜這いは、何とか成功させたわけだし）
蒼太らは敷かれた布団と布団のあいだに腰を下ろし、女子三人と向かい合った。
四人の男子は、正座の状態で頬を強ばらせている。いまだに緊張しているのか、しきりに出入り口の方角に視線を向けていた。
「おいおい、まだブルってんのかよ」
「だって、先生が見回りにきたらと思うと……」
「鍵は閉めてあるんだし、大丈夫だよ。いざとなったら、押し入れの中に隠れてやり過ごせばいいんだから」

日菜子らも不安なのか、突然の訪問者に戸惑っているのは明らかだ。
蒼太は物怖じせず、颯爽とした態度で切りだした。
「今日はさ、怪談話をしにきたんだ」
「え……恐い話？」
「そう。日菜子ちゃん、照明消してくれる？」
「う、うん」
ジャージのポケットからペンライトを取りだすと、日菜子が布団から立ちあがり、照明のスイッチに歩み寄る。
室内が一瞬にして暗闇に包まれ、ライトの仄かな明かりが蒼太の顔をぼんやり浮かびあがらせた。
一般的に、女の子は怪談話が大好きだ。特に日菜子が人一倍恐がりなのは、以前から知っていた。
三人の女子はさっそく身を寄せ合い、やや怯えた眼差しを向ける。
「お前らも、一人ずつ怪談話をするんだぞ」
「え？　いや、僕らはその手の話は詳しくないから」
彼らはにべもなく拒否したあと、肩をそわそわ揺すった。

四人の男子の関心は、一刻も早い退散に占められているようだ。
（ホントに……使えない奴らだな。しゃきっとしたところを見せるチャンスなのに、お前らのほうがビビってどうすんだよ）
胸底で毒づいたものの、人の性格がそう簡単に変わるはずもなかった。
気弱なクラスメートを当てにしたところで、女尊男卑の校風を改革するのは無理なのかもしれない。
あきらめに近い感情を抱きつつ、蒼太は予定どおりに怪談話を披露した。
この日のために用意しておいた、とっておきの恐ろしい話だ。
ペンライトの光を顎の下から当て、緊迫感を演出すれば、日菜子はとなりの女子の手を握り、頬を強ばらせる。
「見ぃいたなぁあぁぁっ！」
「きゃっ」
これまた定番どおり、最後は決めゼリフで驚かせ、蒼太の怪談話はおよそ五分程度で終了した。
日菜子の怯えた表情にしてやったりの笑みを浮かべたものの、どうにも今ひとつ盛りあがらない。真横に座る男子らは相変わらず出入り口を気にし、しらけたムードが

少年のやる気を急速に奪った。
「蒼太くん……すごく恐かった」
「あ、ありがとう」
性格のいい日菜子だけは気をつかってくれたが、二人の女子はいかにも期待外れといった顔をしている。
「ねえ、そろそろ戻らない？」
「あ、うん……そうだな」
ノッポから肩をつつかれ、蒼太はもはや同意するしかなかった。
（目的は遂行したし、一応こいつらも約束は果たしたんだから、ここが引き時かな。あぁ……なんか疲れちまったよ）
畳からゆっくり立ちあがり、日菜子がすかさず照明をつける。
「部屋に戻るの？」
「え？　う、うん」
できれば昼間の件を謝罪し、二人きりで話がしたい。
至極当然の感情を抱いたものの、さすがに今夜は無理そうだ。ペンライトの明かりを消した直後、坊さんが泣き顔で二人の女子に拝み倒した。

「わ、悪いんですけど……先に廊下に出て、様子を探ってくれないかな？　お願いします！」
他の男子もつられて頭をペコペコ下げ、情けなさから唇を噛みしめる。
決死の覚悟で臨んだはずの夜這いは、男子陣の度胸のなさを見せつけるだけの結果になってしまった。
（しかも、同級生の女の子に敬語って……これじゃ逆効果じゃねえか）
思わず目を背けたところで、一人の女子が日菜子に提案する。
「ついでに、私たちもとなりの部屋に行こうよ」
「うん……そうだね。じゃ、男子はあとからついてきて」
四人の男子は安堵し、女子の後ろを金魚の糞のようについていく。
蒼太は二度目の溜め息をつき、最後尾から伏し目がちに歩いていった。
扉が開けられ、日菜子が隙間から廊下をうかがう。
「……大丈夫。誰もいないし、先生が来る気配もないわ。今がチャンスかも」
呆れたことに、男子らはろくな挨拶もせず、脱兎のごとく部屋を飛びだしていった。
彼らの逃げ足の速さには、ただぽかんとするばかりだ。
（あいつら……また俺を置き去りにしやがった）

二人の女子も、唖然としながらとなりの部屋に向かう。
「蒼太くんも、早く」
部屋の外に促されたとたん、日菜子の顔が真正面に入り、愛らしい容貌に胸がときめいた。
何とか二人きりになったので、昼間の謝罪だけでも済ませておきたい。
蒼太は口元に手を寄せ、廊下側に声が洩れぬよう、囁き声で懇願した。
「あの……ちょっとだけ……いいかな？」
「え？」
「話しておきたいことがあるんだ」
「でも……早く戻ったほうがいいんじゃ」
「頼むよっ。ほんの一分で終わるから」
美少女は眉根を寄せ、困惑げに思案する。そして小さく頷いたあと、二人の女子に向かって声をかけた。
「私、トイレに寄ってから行くね」
「うん、わかった。じゃ、先に行ってる」
男子の訪問がよほど退屈だったのか、二人の女子は何の疑問も持たずにとなりの部

屋の扉を開ける。
賑やかな声が廊下に反響し、扉が閉められると同時に静寂があたりを包んだ。
「話って……何？」
日菜子が室内に戻り、神妙な面持ちで問いかける。
「あの……ちゃんと……謝っておこうと思って。その……夕方のこと。ごめん」
彼女は下を向いて何も答えなかったが、次第に目元が染まりだした。
「まだ……怒ってるよね？」
「ううん、怒ってないよ」
「ホ、ホントに？」
「突然だったから……びっくりしただけ」
「あぁ、よかったぁ。明日、どんな顔したらいいかって、ずっと悩んでたんだ」
「私だって同じだよ。蒼太くん、一人だけ残して帰っちゃったから」
「じゃ、交際の承諾はまだ生きてるんだね？」
息せき切って問いかけると、日菜子は顔を首筋まで真っ赤にする。
（か、かわいいなぁ）
生唾を飲みこんだ瞬間、少女はぽつりと告げた。

「美樹に……アドバイスされたの」
「へ？　神社であったこと……話したの？」
「……ごめんね」
「なんて言ってた？」
「男は……そういう生き物だから、理解しなきゃならないこともあるって」
「そ、そうか」
美樹は蒼太を非難する一方で、日菜子へのフォローも忘れていなかったのだ。
約束はすっぽかされたものの、かつてのガールフレンドに感謝しつつ、とりあえずひと息つく。
よこしまな思いが再び目を覚まし、胸の奥が甘く疼いた。
「キス……していい？」
「そんなことしてる暇ないでしょ？」
甘くねめつける振る舞いに男心がくすぐられ、いても立ってもいられなくなる。
「ほんの軽くだけ。今度は、絶対に触ったりしないから。ね？」
「……もう」
日菜子は身をよじって恥じらうも、決して嫌がる素振りを見せない。それどころか、

返答の代わりにつぶらな瞳を真っすぐ向けてきた。
それとなく顔を近づければ、美少女は目を閉じ、形のいい顎をクンと突きあげる。
（キスしても……いいってことだよな）
まさか、こんなに早く仲直りできるとは思ってもいなかった。しかも彼女は、二度目のキスも受けいれてくれたのだ。
神社のときより、二人の距離はさらに縮まっているのではないか。
桜色の唇まで、あと数センチ。心臓がドラムロールのごとく鳴り響いた直後、少年の高揚感は一瞬にして飛び散った。
突然、廊下側から女性と思われる甲高い声が響き渡ったのである。

3

「あんたたち、何やってんの⁉」
（えっ⁉）
肩をビクリと震わせれば、日菜子も目を大きく見開く。二人は同時にドアの方向を見やり、耳に全神経を集中させた。

「消灯時間は十一時よ。わかってる？」
「はあぁい」
「それまでに、自分たちの部屋に帰ること。騒いだりしちゃ、だめだからね」
独特のアルトボイスは、紛れもなくテニス部顧問の君島だ。
タイミング悪く、女子部屋の見回りに来たらしい。
（普通は消灯直前に来るだろっ！　や、やばいっ！　あの先生、俺には特に厳しいんだ！）
男の度胸と覚悟はどこへやら、蒼太は青ざめた顔で立ち竦んだ。
となりの部屋の扉が閉められ、スリッパの音が近づいてくる。
このまま、ぼんやり突っ立っているわけにはいかない。
とっさに内鍵をかけようとしたものの、日菜子はなぜか制し、絶体絶命の状況に全身が汗ばんだ。
「こっち」
少女は囁き声で告げたあと、照明のスイッチを素早く消し、手首を掴んで室内の奥に取って返した。
（あ……ど、どうするつもりなんだ？）

彼女は掛け布団を捲り、蒼太を中に押しこむ。そして自分も寝転びながら、掛け布団を頭からすっぽり被った。
「もっと近くに寄って」
「あ、うん」
今は、ためらっている暇はない。
君島に見つかれば、小言だけで終わるはずがないのだ。
言われたとおりに寄り添い、身体をくの字に折り曲げる。息を潜めた直後、扉を開け放つ音が心臓をナイフのごとく抉った。
「こっちは真っ暗だわ。みんな、となりの部屋に行ってるのかしら？」
「う、ううン」
「誰か、いるの？」
「あ……君島……先生。何ですか？」
「あら？　あなた一人？」
「え、ええ。ちょっと疲れちゃって。こっちの部屋で、寝かせてもらってたんです」
日菜子は布団から首を出し、いかにも眠たげな声を発して寝ていたフリをする。
（そ、そうか。あそこで内鍵を閉める音が聞こえたら、逆に不審がるよな。あえて寝

てるフリして、君島をやり過ごそうって作戦か）
ふだんのおっとりした性格からはとても考えられない、適切な状況判断だ。
感謝しつつ赤子のようにへばりつき、さらには足を絡める。
君島に、不自然さを感じさせてはならない。寝ているのは日菜子一人だと思わせるのだ。
美少女は緊張から身を強ばらせていたが、ふんわりした弾力が手のひらを通してはっきり伝わった。
（なんてフニフニしてるんだ。柔らかくて、あったかくて。くうぅぅ、たまらん）
日菜子が必死に演技しているというのに、役得とばかりに感触を堪能しては匂いを嗅ぎまくる。やがて若い欲望が覚醒し、熱い血液が股間に集中していった。
（あぁ……もっとじっくり触りたいな）
男の本音が顔を覗かせるも、神社の一件があるだけに理性がストップをかける。それでも、一度芽生えた悪戯心は止められない。
蒼太は日菜子に気取られぬよう、脇腹に添えた手をそろりそろりと上げていった。
パジャマの上からとはいえ、美少女の肢体を触っているのだ。
なだらかなカーブを描くボディラインに陶酔し、大量のドーパミンが湧出する。

（や、やべ……夕方に二度も出してんのに、チンチンが勃ってきた）
さすがに、今度ばかりは勃起を押しつけるわけにはいかない。
意識的に腰を引いたところで、日菜子の身体を這っていた指先が小高い丘陵をとらえた。
（あ、もしかして……おっぱい？　あ、あ、あぁ!?）
お椀を伏せたような膨らみが、手のひらの中にすっぽり収まる。全体がやけにやんわりしており、ブラジャーの感触はまったく伝わらなかった。
（う、嘘っ！　ノーブラかよっ!?）
喉をゴクリと鳴らしたとたん、手の甲に鋭い痛みが走る。日菜子につねられ、思わず手を浮かせば、今度は指先が小さな突起に触れた。
（お、おおっ、こ、これは……乳首っ!?）
全身の毛穴が粟立ち、鼻息が荒くなる。
せっかく許しを得たのに、自らご破算にするつもりか。
もう一人の自分がたしなめるも、指先は意に反して頂上の尖りを撫でまわした。
肉粒を上下左右に優しくこねまわせば、乳頭はみるみる大きさを増していく。
（ち、乳首、勃ってる……あ、いでででっ！）

日菜子が手を思いきりつねりあげ、蒼太はようやく我に返った。
君島との会話はまだ続いており、これ以上は自粛したほうがよさそうだ。
「そう、今日はかなり暑かったものね。保健の先生に診てもらわないで大丈夫？」
「あ、大丈夫です。ただ眠いだけですから」
「ごめんなさいね、邪魔しちゃって。ゆっくり眠りなさい」
君島は日菜子を信頼しており、はなから疑惑の目は向けていない。
部屋への入室はもちろん、照明をつけることもなく、やがて扉を閉める音だけが聞こえてきた。
「はあぁぁっ」
少女が大きな息を吐き、ゆっくり脱力する。
「行った？」
「うん、でも……まだ廊下をうろついてるかも」
「そうか。このまま、しばらく様子を見たほうがいいかもね」
ウキウキしながらピタリと張りつくと、日菜子は再び身を強ばらせた。
「……蒼太くん」
「ん？」

「さっき、変なとこ、触ったでしょ？」
「ご、ごめん、わざとじゃないんだ。暗くて何も見えなかったし、君島にバレないよう、こっちも必死だったんだよ」
掛け布団から恐るおそる顔を出せば、カーテンの隙間から射しこむ月明かりが少女の表情を照らしだす。
日菜子は甘く睨みつけ、唇をツンと尖らせていた。
危機的状況によるものか、それとも乳首をまさぐったせいか、身体から凄まじい熱を発している。
甘酸っぱい匂いがムンムン放たれ、股間の逸物がさらにいなないた。
「言い訳はいいから……もう少し離れて」
「え？　でも君島の奴、行ったフリしてまだ部屋の前にいるかも。突然、ドアを開けられたら、まずいんじゃない？」
「やン……脅かさないで」
「……あ」
恐怖に駆られた日菜子が抱きつき、蒼太は想定外の展開に面食らった。
胸が合わさり、柔らかい下腹が押し当てられる。しかも彼女の片足が股のあいだに

すべりこみ、むちっとした太腿が裏茎と陰嚢にあてがわれた。
（おっ、おっ、おおっ！）
肉筒が脈を打ち、性欲の炎が股間で燃えあがる。
純真な乙女も男の生理現象に気がついたのか、睫毛を小さく震わせ、そのままピクリとも動かなくなった。
（ひ、日菜子ちゃんの太腿が、俺のチンポをっ!?）
会陰を引き締め、荒れ狂う性衝動を必死に抑えこむ。それでも肉悦のほむらは鎮火せず、脳幹をバラ色に染めあげていった。
「……蒼太くん」
「え？」
「なんか……硬いのが当たってる」
「ご、ごめんっ。自分の意思じゃ……どうにもならないんだ。好きな女の子を前にすると、エッチなことばっかり考えちゃって」
今度は素直に謝るも、日菜子はなぜか離れない。それどころか足を微かに動かし、ペニスの感触を確かめているかのように思えた。
（ま、まさか……気のせいだよ。日菜子ちゃんが自分から……おふっ）

腰に熱感が走り、ふたつの肉玉が吊りあがった。
深奥部で灼熱の溶岩流がうねり、心臓が早鐘を打った。
柔らかい指が股間の膨らみに添えられ、唇の端を歪めて美少女を注視する。
彼女はひっついたまま、掛け布団の隙間から蒼太の下腹部を見下ろしていた。
「すごい……鉄の棒みたい」
「あ、あ……ひ、日菜子ちゃん……だ、だめっ」
指先は繊細な動きを見せ、陰嚢、裏茎、雁首をさわさわ擦りあげる。
「そ、そんなことしたら……」
「そんなことしたら……何？」
日菜子にじっと見つめられただけで、胸の奥が妖しくざわついた。
「パンツの中に……出ちゃうよ」
「だったら……パンツ脱いで」
「え、ええっ!?」
予想だにしない返答に、かえって冷静さを取り戻してしまう。
目を凝らして表情を探れば、彼女の目はとろんとし、いつの間にか息づかいも荒くなっていた。

乳首への愛撫が、牝の本能を呼び起こしたのか。次の瞬間、蒼太は美樹の言葉を思いだした。

日菜子が、エッチでスケベな女の子だということを……。

「……見せて」

「へ？」

「どんなふうになってるの？」

「ま、まずいよ。君島が、まだいるかもしれないし」

「いないもん」

「ほ、他の女の子たちが戻ってくるかも」

「大丈夫……昨日だって、ひとつの部屋で消灯過ぎまで騒いでたんだから」

耳を澄ませば、確かにとなりの部屋から女子らの笑い声が聞こえてくる。

それでも顔を見せない日菜子を心配した誰かが、様子を見にやってくる可能性はありうるのだ。

「や、やっぱりまずいって……明日、明日見せてあげるから」

男という生き物は、いざとなるとだらしない。美少女の積極的な振る舞いに泡を食った蒼太は、顔面汗まみれになりながら突っぱねた。

「だって、このままじゃ……寝れないでしょ？」
「へ？」
「美樹から聞いたもん」
「な、何を？」
「男の人は一度その気になると、悶々として眠れなくなるって」
早熟な少女は、純真無垢な親友に性の知識をひけらかしているようだ。
決して間違った情報ではないだけに、未熟な少年はうろたえた。
「そ、それは……あぁ、ちょっ!?」
驚いたことに、日菜子は掛け布団をはねのけ、身を起こしざま蒼太のジャージのウエストに手を添える。そしてためらうことなく、ズボンをトランクスごと引き下ろした。
腰を跳ねあげた隙を衝かれ、布地がペロンと捲られる。電光石火の早業に抗う暇もなく、いきり勃った肉筒がビンと飛びだした。
（あ、あああっ!?）
いくら照明が消されているとはいえ、好きな女の子の前で欲情した姿を晒しているのだ。猛烈な羞恥が襲いかかり、蒼太は額から大量の脂汗を噴きこぼした。

「嘘っ……こんなに……大きくなるんだ」
日菜子は息を呑み、隆々とした牡茎に驚愕の目を向ける。
月明かりはペニスに陰翳を作り、亀頭から雁首はもちろん、ぷっくりした胴体の青筋まで浮かびあがらせていた。
「も、も、もういいでしょ？」
できれば美少女相手に快楽を追求したかったが、そんな余裕はとても持てない。
慌ててズボンを引きあげようとした刹那、今度は雷撃にも似た肉悦が股間の中心を貫いた。
「あ、おぉぉぉっ」
日菜子が肉筒に指を絡ませ、顔を近づける。さらに上下にしごかれ、ペニスがビンビンにしなった。
（ひ、日菜子ちゃんに、チンポを握られてるぅぅっ！）
怒濤の昂奮が押し寄せ、体内から熱い塊が迫りあがる。思考が放出願望に占められ、拒絶の言葉が出てこない。
「あ、先っぽからカウパー氏腺液が出てきた」
「あうあうっ」

先走りの現象も、美樹から仕入れたのだろう。美少女の口から専門用語が飛びだし、昂奮度は高まるばかりだ。
日菜子は柔らかい指腹で雁首をこすりあげ、次に親指を鈴口にすべらせた。
「あ、あ、先っぽぉぉっ！」
「やっぱり、ここ……気持ちいいんだ」
ぞわぞわした快美に翻弄され、両足を一直線に突っ張らせる。
（み、美樹の奴ぅ……とんでもないことばかり教えやがって）
彼女の手コキは、美樹のそれに相通じるものがある。少なくても、処女の女の子が見せる性戯ではない。
清廉な外見とエッチな振る舞いとのギャップに、牡の本能がいやが上にも揺り動かされ、我慢の限界は瞬く間に頂点に達した。
「あっ……だ、だめっ、そんなことしたらイッちゃうよ」
「いいよ、出して。イクとこ見たい」
「だ、だって、こんなとこで出したら、布団が汚れちゃうし」
現実的なセリフで手筒をストップさせようとしたものの、日菜子はこれまた想定外の行動に打って出た。

「はっ、はっ、はぁぁっ」
宝冠部に生温かいねっとりした感触が走り、脳裏がピンク色の霧に包まれる。
滾る男根を、日菜子が小さな口を開けて呑みこんだのである。

4

（うお、嘘っ、嘘だぁぁぁっ!?）
少女は女座りの体勢から身を屈め、怒張を真上から咥えこんでいく。そして中途まで招き入れたあと、顔をゆったり引きあげていった。
「ン、ン……ふぅ」
口からペニスがちゅぽんと外れ、唾液が唇と先端のあいだで透明な糸を引く。
日菜子は湿った吐息をこぼしたあと、亀頭をソフトクリームのように舐めあげた。
「ん、むむっ」
赤い舌が鈴口はもちろん、雁首から縫い目をチロチロ這い嬲る。
虚ろな眼差し、紅色に染まった頬が悩ましかった。ディープキスを飛び越え、初のフェラチオを体験している状況が信じられなかった。

自制する間もなく、欲望の奔流に足元を掬われる。
（ま、まさか……俺が……布団を汚すって言ったから？）
もしかすると、精液を口の中に放出させるための口戯なのではないか。そうだとしても口内射精するわけにはいかず、蒼太は快楽と苦悩の狭間で煩悶した。
日菜子は男根にたっぷりの唾をまぶしたあと、肉の塊を再びがっぽり咥えこむ。
「く、おぉぉっ」
口唇の端から透明な雫がこぼれ落ち、月明かりを反射してキラキラ光る様がなまめかしかった。
少女は眉間に皺を寄せ、中ピッチの速度で首を上下させる。逆に蒼太のほうは顔を左右に振り、足の爪先を内側に湾曲させた。
（み、美樹の奴、フェラチオのやり方まで教えてたなんて。何考えてんだよ！）
唇と頬の内側が胴体を往復するたびに、快楽の衝撃波が間隔を狭めていく。
「む、むおっ！」
目を見開き、全身に力を込めた直後、小振りなヒップが視界に入った。
彼女は四つん這いの体勢に取って代わり、丸みのある桃尻が浮きあがっている。
蒼太は本能の命ずるまま、震える指先をヒップに伸ばした。

美尻を手のひらで撫でまわすと、張りのある柔肌が指を押し返す。
日菜子はフェラチオに集中しているのか、嫌がる素振りを見せない。ここぞとばかりに股の付け根に手を伸ばすと、ぐっしょりした感触が指に伝わった。
（あっ、あっ、あっ……ぬ、濡れてるっ!?）
まさか処女の女の子が、パンティばかりか、パジャマズボンに染みだすほどの愛液を湧出させるとは……。
股ぐらを覗きこむと、確かにレモンイエローの布地に大きなシミが浮きあがっている。蒼太は鼻の穴を目いっぱい開き、猛禽類にも似た目つきでパジャマズボンを捲り下ろした。
臀裂の谷間から蠱惑的な丘が顔を覗かせ、秘園にべったり張りついたコットン生地にはくっきりした縦筋が刻まれている。
美樹もペニスをしごきながらパンティを濡らしていたが、日菜子も同じ。性的昂奮に大量の愛液を垂れ流していたのだ。
（あ、あ、見たい、見たい……日菜子ちゃんのおマ〇コ、見たい！）
少女の抽送は次第に速度を増し、肉筒が早くも熱い脈を打ちはじめていた。
放出する前に、乙女の恥肉を目に焼きつけておきたい。そう考えた蒼太は、脇目も

振らずにパンティを引き下ろした。
「ンっ!?」
顔の動きが止まり、美少女が小さな呻き声をあげる。
(あ、あともう少しっ!)
さらにズボンごとズリ下げると、彼女はペニスを口から吐きだし、布地を手で押さえつけた。
「……だめっ」
「ど、どうして?」
「だって……恥ずかしいから」
「俺だって、恥ずかしかったんだよ。それに、ずるくない? 俺のは、さんざん見ておいて」
一度火がついた欲望は、雨が降ろうが槍が降ろうが収まらない。
思い焦がれた美少女のプライベートゾーンは、まだ拝んでいないのだ。
「ね、見せて」
今度は下手に出て哀願すれば、日菜子は上下の唇を口の中ではんだ。
のんびりしている暇はない。消灯時間には間があったが、となりの部屋にいる女子

らがいつ戻ってくるかわからないのだ。
こんな場面を目撃されたら、大騒ぎになるのは目に見えている。
（今日のホテルは窓際に桟がないし……すぐに押し入れの中に隠れるしかないけど、女子が寝入るまでの缶詰状態なんてキツすぎるよ）
逃亡ルートをとっさに模索し、必死の形相で懇願する。
「お願い、ねっ！」
やっとのことで思いが通じたのか、日菜子は自らパジャマズボンとパンティを下ろしていった。
（お、おおっ⁉）
目を見開き、期待に胸を弾ませる。できれば照明の下で女肉の眼福にあずかりたかったが、贅沢は言ってられない。
「……ちょっとだけだよ」
「う、うん、もちろん！　全然かまわないよ」
少女が脱いだ衣服を掛け布団の下に隠すと、目をぎらつかせた蒼太は来たるべき瞬間に備えて身を起こそうとした。
（あっ⁉）

日菜子は何を思ったのか、いきなり腰を浮かせ、生白い右太腿が目の前を横切る。
突然の振る舞いに仰天した直後、彼女は蒼太の顔を逆向きに跨ぎ、ぱっくり開かれた女陰が眼前にさらけ出された。
（ど、どこが、ちょっとだけなんだ!?　シックスナインじゃないかぁあぁっ!?）
まさかの展開に気持ちがついていかず、惚けた顔で口をぱくぱくさせる。
てっきり座った状態で股を開くだけだと思ったのだが、これも美樹から得た知識なのだろうか。
何にしても純真な乙女は、早熟な少女の言葉を鵜呑みにしているらしい。
ふっくらしたベビーピンクの恥丘、楚々とした翳りを見せる恥毛、はんなりした二本の肉帯。美樹のものとは違ってこぢんまりしており、美しい造形が感動にも似た気持ちを植えつけた。
陰唇が微かに捲れ、狭間でとろみがかった愛蜜がきらめく。
（や、やっぱり濡れてる！　あぁ……愛液が今にもこぼれ落ちてきそう。もっとはっきり見たいよぉ）
日菜子の布団は窓と並行に敷かれているため、ヒップの膨らみが邪魔をして細部までよく見えないのだ。

じっくり観察しようと顔を近づけたとたん、再び股間の中心を快美が貫いた。
「ン、ふっ、ふ、ンぅっ」
日菜子がまたもやペニスを咥えこみ、敏感な尿道口を舐めまわしながら肉胴をしごきたてたのである。
「お、くっ」
新鮮な刺激の連続で、性感はすでにトップギアに跳ねあがっている。
頭を起こしたまま歯を剥きだした直後、今度は甘酸っぱい芳香が鼻腔粘膜にへばりついた。
オレンジの皮を干したような香りに混じり、クリームチーズを彷彿とさせる匂いが性感覚をこれでもかと刺激する。
(こ、これが処女のおマ〇コの匂い!?)
決して香気とは言いがたいのに、なぜこんなにも昂奮するのだろう。
女肉のあわいから放たれる発情臭は嗅神経から大脳皮質に伝わり、牡の性欲本能をオーバーヒートさせた。
ヒップを両手で抱えこみ、すかさず花肉にかぶりついては一心不乱に舐(ねぶ)りまわす。
「あ……だ、だめっ」

突然の蛮行に驚いたのか、日菜子は顔を上げ、鼻にかかった甘い声をあげた。
彼女の言葉は耳に入らない。強い酸味が舌をピリリと突き刺すも、ためらうことなく粘った淫液を喉の奥に流しこむ。
(俺、今……日菜子ちゃんのおマ〇コを舐めてるんだ。おいしい、おいしいよ)
肉の突起は次第にしこり、口の周囲は愛蜜でベタベタになった。
日菜子は腰を振って逃れようとするも、双臀をがっちり掴んで離さない。
法悦のど真ん中に浸りつつ、クリトリスと思われる小さな肉芽を舌先でこねまわせば、下腹部全体が小さな痙攣を引き起こす。
「あ、ン、やっ、ン、ふわぁぁっ」
啜り泣きに近い嬌声に背中を後押しされ、蒼太は羞恥の源にできる限りの快楽を吹きこんだ。
(や、やりたい！　日菜子ちゃんとエッチしたいっ！)
危険と隣り合わせにもかかわらず、牡の欲望が一人歩きを始める。
美少女をその気にさせるべく、唇を窄めてクリットに吸いついた直後、少年は歯を剥きだした。
日菜子がみたび男根にしゃぶりつき、猛烈な勢いで顔を打ち振ったのである。

じゅぽっじゅぷっ、じゅぷぷぷっ、ぎゅぱぱぱぱっ！
派手な吸茎音に続き、筋肉ばかりか骨まで蕩けそうな肉悦が襲いかかる。
（あっ、すごい、すごいよぉぉっ！）
少女も快楽の海原に放りだされ、理性が働かないのだろう。
柔らかい唇で肉筒を苛烈にこすられ、少年の射精欲求は自分の意思とは無関係に臨界点を飛び越えた。
「がっ、はっ！　だ、だめっ、日菜子ちゃん、そんな激しくしたらイッちゃう！　イッちゃうよぉぉっ!!」
「ンっ！　ンっ！　ンぅぅぅっ!!」
女陰から口を離し、我慢の限界を訴えるも、抽送は少しも緩まない。それどころか男根を喉深くまで呑みこみ、まとわりつく熱い息吹と唾液が自制のストッパーを粉々に打ち砕いた。
「やばい、やばい、マジでイッちゃうって！」
このままでは、間違いなく口内射精してしまう。裏返った声で放出間近を告げるも、日菜子は上下の唇で雁首をコリコリと揉みしごいた。
「あ……あ……あぁっ」

「ンっ!?」
臀部が布団から浮き、白濁のマグマが体外に排出される。
蒼太は虚ろな目を天井に向けつつ、思いの丈を心ゆくまで解き放った。
(や、やっちまった)
即座に後悔の念が押し寄せるも、今となってはどうにもならない。
美少女は顔の動きをピタリと止め、ペニスを口に含んだまま微動だにしなかった。
「ひ、日菜子ちゃん」
首を横に伸ばして問いかけると、日菜子は身を起こし、いまだに硬直を崩さない男根を口から抜き取った。
「ご、ごめん……我慢できなくて……あっ」
彼女は布団に座りなおし、喉を緩やかに波打たせる。そして眉根を寄せ、やや複雑な面持ちで口を開いた。
「しょっぱくて……苦い」
「の、の、飲んじゃったの?」
「……うん。だって、そういうものなんでしょ? 違うの?」
純粋培養で育てられた少女は、人から聞いた話をそのまま脳内にインプットするら

しい。
果たして、彼女の純真さを素直に喜ぶべきなのか。
きょとんとする日菜子を、蒼太はただ唖然とした表情で見つめていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索